

チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-1870)の『荒涼館』(Bleak House, 1852-53)は、ディケンズ自身その序文で述べているように、大法院を弾劾する目的で書かれた社会小説である。「ジャーディス対ジャーディス裁判(Jarndyce and Jarndyce)」を中心に、当時社会問題となっていた大法院の遅延に焦点を当て、その腐敗ぶりを示したのだ。しかし、ディケンズの当時の社会悪に対する攻撃は大法院だけに留まらなかった。トム・オール・アローンズ(Tom-All-Along's)のような貧民スラム街とそこから生じる疫病等、ディケンズはその当時イギリスという「国」が抱えていた多くの時事的問題をこの小説の中で扱っている。その結果、『荒涼館』は、こういった問題を放置してきた政治的責任者の無能ぶりを曝け出すこととなった。このような社会批判的要素を多分に含んだ小説を書くに当たり、ディケンズはタイトルの選定に相当頭を悩ましたようである。そして最終的に『荒涼館』と名付けた。「荒涼館」とは、作中人物の一人、ジョン・ジャーディス(John Jarndyce)の家の名前である。この屋敷は以前は「峰の屋敷(the Peaks)」と呼ばれていたのだが、「ジャーディス対ジャーディス裁判」を始めたトム・ジャーディス(Tom Jarndyce)が、裁判に没頭し、彼の心身同様、家も荒れ果ててしまった為に、「荒涼館」と呼ばれるようになったのだ。そして廃虚のようになったこの家を作品で描かれている現在の姿に再建したのが、ジョン・ジャーディスであった。

では何故ディケンズは「国」の問題を論じる際に、「荒涼館」という一登場人物の「家庭」をその小説のタイトルに選んだのだろうか。ノーマン・ペイジはディケンズにとってのタイトルの重要性を指摘し、ディケンズは『荒涼館』というタイトルが最も適切だと感じたのだろうと推測しているが、残念ながらその理由までは論及していない。^三この点について仮説を一つ立てると、ディケンズは「国」と「家庭」とを同じ概念で捉えていたからだと考えられる。というのも、後に述べるが、この小説の中で「国」と「家庭」とに同じ意味合いを持たせているのではないかと思わせる個所があるからだ。そこで、この小論では「国」=「家庭」という仮説を「荒涼館」とサー・レスタ・デッドロック(Sir Leicester Dedlock)の屋敷「チェスニー・ウォールド(Chesney Wold)」とを比較することで立証し、『荒涼館』というタイトルの意義を考察していく。

「荒涼館」とは逆説的な名称である。というのも、かつては荒廃していたのだが、エスタ・サマソン(Esther Summerson)の視点を通して語られるこの家は、少しも「荒涼」としてはいないからだ。そして荒涼館よりも、寧ろチェスニー・ウォールドの方がはるかに「荒涼」としている印象を読者に与える。つまり、この二つの屋敷は、作品を通じて、対比的な描写がなされるのである。例えば、この二つの屋敷が作品の中で最初に言及される時、同じ「侘びしい(dreary)」という言葉を使ってそれぞれ形容される。そして、チェスニー・ウォールドは「非常に侘びしい」(p.9)、荒涼館は「侘びしい場所でない」(p.29)と述べられている。更にこれらの屋敷は、物語の結末で、荒廃の一途をたどるチェスニー・ウォールドと幸福な家庭が築かれた荒涼館と

いう対蹠的な最後を迎える。この二つの屋敷は作品の中で終始一貫して対照的に描かれる訳だが、それは何故であろうか。又、その相違が生じる原因は何処にあるのだろうか。まずは荒涼館についてエスタの成長過程とあわせて見ていく。

エスタは私生児として、後に伯母であることが判明するミス・バーバリ(Miss Barbary)の手によって、厳格に育てられた。級友の誕生日パーティに出席することも許されず、孤独な幼少期を過ごした。そして「エスタ、お前には誕生日なんて無かった方が、生まれなかった方がずっと良かった」(p.16)というミス・バーバリの言葉にエスタは心を深く傷つけられる。この孤独な生活の中でエスタは自分の生き方の指針を見出す。

出来る限り努力して、持って生まれた過ち(それについては、疑う余地も無く罪を感じていながらも、自分では悪意は無いと信じていました)を償おうとし、大きくなるにつれて勤勉になり、満足し、親切な心を持ち、人の為になろうとし、出来れば人から愛を得ようと努力しようとしました。

(pp.17-18)

エスタの物語は、この誓いを実現させていく過程にある。ミス・バーバリの死後、ジャーンディスの庇護を受けることになったエスタは、レディングの寄宿学校に入る。そこで生徒として、又、教師として六年間過ごすことになるが、その間、子供の頃に誓った決意を度々思い出し、「生まれなかった方がずっと良かった」というミス・バーバリの言葉を否定すべく努力し、その結果、そこで多くの人から愛されることとなった。実際、エスタの人生は、このミス・バーバリの言葉を否定し、周囲にいる人たちに親切にすることで、自分の存在意義を見出そうとする努力の連続である。エスタは、常に自分に課せられた義務を堅実に果たそうとするのだ。そしてエスタの最初の語りである第三章のタイトルは「前進(Progress)」となっている。このタイトルが示唆するように、彼女は常に「前進」する女性なのだ。

二十歳になり、エスタはレディングを離れ、ロンドンに出る。そこでエイダ・クレア(Ada Clare)やリチャード・カーストン(Richard Carstone)と出会い、三人で荒涼館に移り住むことになるが、その前に彼女たちはジェリビー夫人(Mrs Jellyby)の家で一夜を過ごした。そこでエスタはジェリビー家の無秩序を目の当たりにする。ジャーンディスは意図的にエスタをジェリビー家に送ったと後に語るが、では彼の意図とは何か。エスタはジェリビー家の感想をジャーンディスから求められると、「第一に家庭の義務を果たすべきだと思います」(p.90)と答えた。又、ジェリビー家で色々と子供たちの世話をし、この家についてあれこれと心配するエスタに対してエイダは、「あなただったら、こんな家からでも家庭を作り出せるでしょうに」(p.40)と言う。これらのことから、ジャーンディスの意図とは、エスタに「家庭」を管理する役目を与える為の準備をさせることであつたと推察できる。秩序の無い家庭を見せることで、その重要性をエスタに認識させたのである。そしてジャーンディスの思惑通り、エスタは荒涼館の秩序を保つことになるのだ。

エスタたちが荒涼館に向かうのは第六章である。それまでの章を簡潔に述べると、第一章

は霧の中のロンドン、第二章では雨に打たれるチェスニー・ワールドがそれぞれ描かれ、第三章においてエスタが登場する。ミス・バーバリによって厳格に育てられた彼女は、友人を一人も持たない孤独な少女時代を送った。二十歳になり彼女はロンドンに出るが、そこはあたり一面、濃い霧で覆われている。そしてエイダやりチャードと一緒にいるのだ。第四章、第五章も場面は変わらず、彼女たちは霧の中のロンドンにいる。そして第六章で彼女たちははいよいよ荒涼館へと旅立つのだ。この章は次のような文章で始まる。

その日は非常に明るく、私たちが西へと向かうにつれて益々明るくなりました。私たちは日光と爽やかな空気の中を進んでいき、通りがどこまで続くのかということや、店の輝き、往来の激しさ、色とりどりの花のように好天気をもたらしたように思えた人々の群れ等に驚いていました。(p.57)

エスタたちが霧の中のロンドンを離れ、西へ向かうにつれて、周囲はどんどん明るくなっていく。同様に読者も、ここで初めて太陽を見ることになるのだ。まるで、太陽の死に対して喪に服しているかのようなロンドン、陰鬱な雨が降るチェスニー・ワールドから逃れて、太陽の光を求めて荒涼館へと向かっていくかのようなのである。一行が馬車での長旅を終える頃には夜となっていた。そして彼らは星の輝く夜空の下で一際明かりの輝く家、荒涼館へと向かっていく。ドアが開かれ、そこから光が流れ出る。ジョン・ジャーディスに温かく迎えられた彼女たちは中へと案内されるが、その部屋には暖炉の火が赤々と輝いていた。古風な家で、間取りが迷路のように複雑ではあるが、エスタたちはこの家を好ましく感じる。事実、エスタたちが受けるこの家の印象は、「荒涼」というイメージからは程遠い。

あちらこちらカーテンの影によって柔らかくなっていて、星の光る夜に輝き出る明るい家、明るさ、暖かさ、居心地の良さ、遠くから聞こえてくる夕食を準備する、温かくもてなす音、私たちが見るもの全てを明るくする寛大な主人の顔、それに私たちに聞こえてくるもの全てへの伴奏を静かに奏でるのに申し分の無い外のそよ風、そういったものが荒涼館の第一印象でした。

(p.63)

「明るさ、暖かさ、居心地の良さ」等、エスタの見たこの家には「荒涼」と呼ばれるに相応しい要素は何一つ無く、彼女たちはすぐにこの家にとけ込んでいく。そして更に注目すべきなのは、この章のタイトルが「家でくつろぐ(Quite at Home)」となっていることだ。エスタは荒涼館に来て初めて「家でくつろぐ」ことを知ったのである。厳格な伯母に育てられ、寄宿学校で生徒として、教師として六年間過ごしたエスタが初めて経験する家庭生活が、荒涼館においてであったのだ。

エスタが荒涼館から受けるのは「光」である。そこでは太陽がさんさんと輝き、夜は星が出る。この光により、荒涼館はチェスニー・ワールドと、又、大法院とは違う世界を作っている。

る。チェスニー・ワールドと大法院は雨と霧に覆われた光の無い世界、即ち「闇」であるからだ。勿論、チェスニー・ワールドでも雨が止み、太陽が顔を出すことはあるが、その時は光がレディ・デッドロック(Lady Dedlock)の肖像画に差し込み、陰気な影を作る。エスタが荒涼館で感じた光を、読者はチェスニー・ワールドから感じることは出来ない。荒涼館に光をもたらすのはジャーディスであるが、この光に更に輝きを与えるのがエスタである。彼女の姓サマソンとは「夏の太陽(summer sun)」を意味するからだ。つまり、エスタのいる所には常に光が伴うのである。例えば、ジャーディスとエイダがエスタのことを「ダードンおぼさんの行く所にはどこでも、太陽の光とそよ風があるのです」(p.387)と語っているように、エスタはこの小説の中で、「光」を表す象徴となっているのだ。

エスタは荒涼館に着いた日の夜、この屋敷の鍵を渡され、荒涼館を管理することとなった。このことから、この家の主人はジャーディスではあるが、エスタが荒涼館での中心的人物として機能すると考えてよいだろう。そして彼女はこの役目を忠実に果たす。ジョン・ジャーディスによって再び以前の姿に立ち返った荒涼館の秩序をエスタが維持管理し、更に発展させるのである。自分に「エスタ、エスタ、義務を果たすのよ」(p.76)と呼びかけ、エスタは自分に課せられた仕事、義務を遂行するのだ。エスタはよくこの「義務(duty)」という言葉を口にする。誰かの役に立ちたいという少女の頃の決意を具体的に発展させているのだが、それではエスタは義務を果たすことを如何にして達成しようとしたか。ジェリビー夫人と同様、家庭を蔑ろにして、慈善事業に熱中するパーディグル夫人(Mrs Pardiggle)から意見を求められたエスタは、次のように述べる。

私は自分のすぐ身近な人々の為に、出来る限り役に立つようにし、自分に出来るだけの奉仕を尽くすこと、そしてこの義務の範囲を徐々に広めていくように努めるのが一番良いと考えました。(p.97)

「自分のすぐ身近な人々」とは勿論、家庭を指してのことであり、ジェリビー夫人について述べた時の「家庭の義務」と同じ事である。つまり、エスタの考えでは、まず家庭において自分の義務を果たすことが何よりも大事なのだ。裏を返せば、家庭においてきちんと義務を果たさなければ、当然家庭の外においても義務を果たすことが出来ないのである。これがエスタの価値観となっている。エスタはこの主張を荒涼館で自ら実践していくのだ。

さて、エスタたちを温かく迎え入れた荒涼館の明るさを描いた次の第七章で、まるで二つの屋敷の正反対の性質をより際立たせるかのよう、場面は再びチェスニー・ワールドに移る。そこでは相変わらず雨が降り続けている。

エスタが眠っている間も、エスタが目を覚ましている間も、リンカンシア州の屋敷は、依然として雨が降っている。広い、石を敷いたテラスの歩道、「幽霊の小道」の上に、雨が昼も夜も常に滴り、滴り、滴り、落ちていく。リンカンシア州では天気がいかにひどいので、この上なく生き生きとした想像力でさえ、再び天気が良くなるだろうと予期する

ことは、殆どないのである。

(p.77)

「幽霊の小道」とは、デッドロック家で語り継がれている先祖の夫婦の不和から生じた悲劇の伝説である。勿論この正体は、テラスに滴り落ちる雨音なのだが、その雨とこの一族の過去の不幸とが結びつけられていることにより、雨の持つ暗さ、不気味さが一層強められているのだ。又、「エスタが眠っている間も、エスタが目を覚ましている間も」ということは、ここチェスニー・ワールドには変化が無いことを表している。デッドロックという名前が「行き詰まり (deadlock)」の意を含んでいることから明らかなように、チェスニー・ワールドは、「前進」するエスタの世界、荒涼館の世界とは相容れない世界なのだ。そしてこの降り続く雨が、この屋敷から生命力を奪ってしまっているかのような印象を与える。作品の中でも「生命力のない肉体」(p.514)と述べられているように、チェスニー・ワールドの暗さは生命力の欠如、つまりは「死」をも表していると考えられる。この屋敷にはデッドロック家一族や政治家等、上流階級の人間が多数集まる。そこでは、自分たちの権力を維持する為に、賄賂が横行する腐敗した官僚政治の実態が描かれている。そして、チェスニー・ワールドでこのような墮落した人間が集まった時に催されるのは、「陰気な晩餐会、鉛のような昼食会、化け物だらけの舞踏会」(p.515)である。この生気を感じられない屋敷をディケンズは屋敷の周りに立つ木々に例えている。

屋敷の周りじゅうを、木の葉が厚く、しかし決して速いということはなく、落ちていく。というのも、それらの葉が、陰気にゆっくりと、死んだように軽く、くるくる回りながら落ちるからである。(p.364)

木々にとって生命の衰退を表わすものは、枯れ果てた落ち葉である。そして屋敷の周りを徐々に覆っていく落ち葉が、この屋敷も落ち葉同様、衰退の過程にあるということの暗喩となっているのだ。デッドロック家の衰退を引き起こした原因は二つある。一つは選挙で破れること、もう一つはレディ・デッドロックの過去の秘密の発覚、それによる彼女の失踪、そして死である。これらデッドロック家の危機を扱っているのは第四十章であるが、この章には「国家的と家庭的(National and Domestic)」というタイトルがつけられている。これはディケンズが「国」と「家庭」とを同じ次元で考えている意識の表われである。「国」と「家庭」、「政治家」と「家主」とが、同じ関係で扱われているのだ。サー・レスタは政治家としての面、そして家庭の主人としての面の両方で危機に立たされることとなる。

この二つの屋敷の対照を最も際立たせているのが、結末の描写である。この作品の最後の二章ではチェスニー・ワールドと荒涼館の現在の姿が述べられている。まず第六十六章でチェスニー・ワールドが描かれる。社交界の華であるレディ・デッドロックを失ったチェスニー・ワールドには、もはや人々が集まることは殆ど無く、屋敷は参観されることもなくなった。サー・レスタにも死が待ち受けているだけである。そして屋敷は荒廃していく。

チェスニー・ワールドはこのようであった。屋敷の大部分が、暗闇と空白に明け渡され、夏の太陽も下でも、冬の荒れ模様の天気の下でも、殆ど変わること無く、いつも非常に陰気で、動きも無く、今では昼間、旗がなびくことも無く、夜に明かりがきらめくことも無く、行き来する家族も無く、薄暗くて冷え冷えした部屋の化身となる訪問者も無く、そこには生命の活動も無い よそ者の目からでさえも、リンカンシア州の屋敷からは、情熱も壯観さも消え失せ、どんよりした静けさに身を任せていた。

(p.793)

一方最終章においては、エスタと彼女の夫アラン・ウッドコート(Allan Woodcourt)との生活が語られる。彼らが住んでいる家は、ジャーディスが二人の為に、ヨークシャーに建てた家である。その家は、再び「荒涼館」と名付けられた。又、元の荒涼館では、ジャーディスとエイダ、それに彼女の息子が暮らしている。エスタとアランは、決して裕福とは言えないながらも、幸福な日々を送っていた。

私たちは、銀行預金は豊かではありませんが、いつもうまくいっていましたし、それで満ち足りています。夫と一緒に外を歩くと、いつも人々が夫を賞賛するのを耳にします。どんな身分の人の家に行っても、いつでも夫を褒め称える言葉を耳にし、彼らの中に感謝の眼差しを見るのです。夜、床につくといつでも、その日一日の間に、夫が誰かの苦しみを和らげ、困っている時の同胞を慰めてあげたことを知るので。治るのが手遅れになってしまった人の寝床から、息を引き取る間に、夫の辛抱強い奉仕に対して、感謝の言葉が何度となく上がっていったことを私は知っています。これが豊かではないでしょうか。

(p.796)

このように、荒涼館とチェスニー・ワールドは、対照的な最後を迎える。チェスニー・ワールドのデッドロック家は、崩壊状態にある。サー・レスタは夫人を失い、また子供もいない。つまり、この家には未来が無いことを意味する。一方エスタには娘が二人おり、荒涼館の未来は約束されている。このような違いはどこから生じるのだろうか。この作品は、大法院を初めとする社会制度の腐敗を示した社会小説である。その最後にこのような二つの屋敷の対照を用意したことや、この小説のタイトルが『荒涼館』であること等を考え合わせると、荒涼館とチェスニー・ワールドを比較させることで作品を終わらせたことに、ディケンズの重要な意図が隠されていると考えられる。

荒涼館の家庭とは、ごく一般的な中流階級の「家庭」である。そこでエスタはその家の鍵を渡され、荒涼館の女主人となる。一方チェスニー・ワールドのデッドロック家は、貴族であり、又、政治家であって、イギリスという「国」を管理する責任があった。荒涼館の迷路のような複雑な構造は、大法院を初めとする社会制度が腐敗し、疫病が蔓延する混沌とした社会の寓意ではないだろうか。このような視点で捉えると、複雑な構造を持つ「家」を管理する工

スタと複雑化した「国」を管理する政治家とは、同じ立場にいることになるのだ。双方とも、あるものを管理する義務を担っているのである。二つの屋敷の運命の違いは、同じ立場にいる人間がこの「義務」を果たしたかによるのだ。

エスタは不断的努力によって、自分を他人の役に立つ人間としていった。自分に与えられた義務を果たし、その影響を周りの人間に広めていくのである。エスタがこのような人間に成長したのは、少女時代にミス・バーバリに言われたことを肯定的に解釈して、そこから勤勉や努力を学んだ為であることは先に述べたが、それと共に、ジャーディスからの影響も考慮に入れるべきだろう。ジャーディスは身寄りの無いエスタやチャーリー(Charley)を助けたように、自分の周りにいる恵まれない人々に、当たり前のこととして援助の手を差し伸べる。そして自分の行った善意に対して人から感謝されることを決して望まない。これは、自分は当然の義務を果たしただけで、わざわざ人から感謝されることではないとジャーディスが考えていたからではないだろうか。例えばジャーディスは慈善家について次のような考えを持っている。

慈善家には二種類ある。一つは少ししか活動しないで、大騒ぎをする人、もう一つは沢山活動するが、全く騒ぎ立てない人だ。

(p.93)

ここでジャーディスの言う二種類の慈善家のうち、前者はジェリビー夫人やパーディグル夫人のことを暗に指している。そして後者については、ジャーディスは誰とは言っていないが、この種の人々とはジャーディス自身やエスタであることが読者には分かる。エスタは、ジャーディスが他人からの謝辞を受け入れないことを奇妙なことだと考えるが、エスタ自身も、他人からの賛辞をその都度否定しようとする。この点で、エスタの善意は、ジャーディスのそれと根本的に変わらないのだ。彼らにとっては、他人の目からは賞賛に値するように思えることであっても、ただ自分の義務を果たしただけに過ぎないのである。勿論、このような善意は完全とは言えない。例えば、彼らはジョー(Jo)を死から救うことは出来なかった。しかしながら、彼らの善意は「一塊のパン種^四」として、徐々に周りの人々に広められていくのである。エスタの感化を受けた例として、キャディー・ジェリビー(Caddy Jellyby)が挙げられる。エスタから義務を果たすことを学んだキャディは、自分の家庭を自らの努力により作り上げていくのだ。

そして忘れてはならないのが、エスタの夫となるアラン・ウッドコート^五の存在である。アランはウェールズの由緒ある家柄という血統を捨ててエスタと結婚した。彼は外科医としてこの小説の中で、エスタと同様、自分の義務を果たす人間として描かれている。それを顕著に表しているのが、難破船でのエピソードである。船医としてインドに渡ったアランは、そこで難破した人々を救い出し、死んだ人々を埋葬して英雄となる。帰国後、彼は医者として、又、友人として、訴訟の為に心身共に衰弱したリチャードの面倒を見る。この時、リチャードはアランについて、「彼がやってくるといつでも部屋は明るくなり、行ってしまおうとまた暗くなるん

だよ」(p.631)と言う。アランは大法院の闇の中にいるリチャードを照らす光であるのだ。既述したように、この作品で「光」とは、エスタのことである。そしてアランもリチャードが語るように「光」であるということは、アランとエスタが同質の人間であることを意味する。難破船で多くの人々の救いとなったように、彼はヨークシャーの救貧院で医師として、貧しい人々の助けとなる。自分の目の前にある義務を忠実に果たすエスタとアランが結ばれることで、荒涼館は今後とも決して「荒涼」とすることがないのだ。

ではチェスニー・ウォールドではどうか。まずレディ・デッドロックから見ていく。彼女は「上流社会の消息の中心となり、上流社会の木の頂点にある」(p.10)女性であった。しかし彼女は、サー・レスタと結婚する前に、ホードン大佐との間に子供(エスタ)を儲けていた。この事実を隠してレディ・デッドロックは貴族であるサー・レスタと結婚したのである。そして彼女がサー・レスタと結婚した目的は、彼が貴族であるという「富と身分」(p.10)を得る為であった。レディ・デッドロックは貴族という「身分」を得る為、ホードン大佐との「家庭」を放棄したのである。それ故に、彼女が犯した罪とは「不義の愛ではなく、愛の無い結婚をしたこと、私生児を産んだことではなく、その子供を産み出した愛を裏切ったこと」であるのだ。彼女は持つべき家庭があったにも拘わらず、その「義務」を投げ出して貴族夫人となったからだ。彼女が雨の降りしきる屋敷で「死ぬ程退屈な」(p.8)生活を送ることは、この義務を果たさなかったことへの「罰」となっている。エスタに自分が実母であることを打ち明けた時、「私は一人で自分の暗闇の道を歩まねばなりません」(p.463)と述べているように、レディ・デッドロックは、自分の犯した罪に対する罰を自覚してはいる。しかしながら「今でもいくらかの自尊心が自分にはある」(p.465)為、今後お互い二度と会わないようにとエスタに頼む。エスタとの関係を否定することは、当然ホードン大佐との関係を否定することにもつながる。しかし、彼女は最後には、ホードン大佐との関係を自ら認めることとなった。過去の秘密がサー・レスタに知れた時、レディ・デッドロックは、家名を汚すことを恐れて失踪した。死を覚悟で家を飛び出した彼女は、死に場所としてホードン大佐の墓場を選んだのである。レディ・デッドロックのこの行為は「彼女が長い間否定した関係を認めること」であり、自分が本来属すべき地位に戻るといって彼女の改心と解釈することもできよう。しかし、それでも彼女が死を免れることができなかつたのは、長い間自分が持つべき「家庭」を無視し続けてきたことへの「罰」であり、更には、彼女の夫であるサー・レスタへの「罰」でもあるのだ。

サー・レスタは政治家としての義務を何一つ果たさなかつた。チェスニー・ウォールドを頂点とする政界は、自分たちの権力維持にのみ執着し、大法院を初めとする社会制度や、トム・オール・アローンズ等のスラム街を改善しようとしなかつたからである。ここでエスタの言う「家庭の義務(the obligations of home)」という言葉が重要な意味を帯びてくる。‘home’とは「家庭」と共に「本国」という意味もあるからだ。「家庭の義務」という言葉を広義に解釈するならば、「国の義務」ともなる。この解釈によって、「国」=「家庭」という概念が鮮明に浮かび上がってくるのだ。つまり、サー・レスタにとって「家庭の義務」とは、イギリスという「国」そのものも含まれるのである。その意味でサー・レスタは、自分の果たすべき「義務」を怠ったことになる。そして正にそれが為、ディケンズはデッドロック家に家庭の幸福を与えなかつた。

ったのだ。サー・レスタは、レディ・デッドロックの秘密を知った時、ショックで倒れた。そして彼は彼女の過去を許しはしたが、自分では彼女を助ける為の行動を何一つとることが出来なかったのである。J・ヒリス・ミラーが「サー・レスタを麻痺させた発作は、彼を身体的に、精神的にいつもそうであった姿にした」と述べているように、何も出来ずにベッドの上で寝かされているサー・レスタは「行き詰まり」の体现であるのだ。ディケンズは政治的に無能な人間を、家庭的無能な人間にしたのである。サー・レスタはバケット警部がレディ・デッドロックを連れ戻してくれるのを期待するしかなかった。更に皮肉なことに、その間に女中であるラウンスウェル夫人と彼女の息子であるジョージが、数十年振りに再会を果たしたのである。彼らが長い年月を越えて再会したのに対し、サー・レスタは、たったの一日でレディ・デッドロックを永久に失う。これこそ「義務」を怠った人間に対してディケンズが下した「罰」であるのだ。

荒涼館とチェスニー・ワールドとの決定的な違いは、エスタの言う「家庭の義務」という点に集約される。そもそも家庭とは社会組織の最小単位であると共に、最も身近な存在でもある。その家庭の義務を忠実に果たす人間を描くことで、ディケンズは社会組織の腐敗に対し、一つの答えを示したのだ。自ら努力し、義務を受け入れること、これこそがこの小説での「救済法」となっているのである。義務を果たした人間と果たさなかった人間のそれぞれの家庭を対照させ、又、それぞれの家庭に正反対のイメージを与え、その未来をも異なるものとして描き出すことで、その意図が明確化されている。ジャーンディスがエスタとアランの為に建てた家に再び「荒涼館」と名付けたことは、荒廃した社会を改革するには「荒涼館」のような家庭が必要であったことを表しているのだ。そしてディケンズは、荒涼館の家庭のように国も機能すれば、と考えていたのではないだろうか。義務を果たす人間によって再建された荒涼館と同様、国も、それを管理する人間がその責任を果たせば、改善することができるというディケンズの願望が「荒涼館」に託されているのだ。それ故に、この小説のタイトルは『荒涼館』でなければならなかったのである。「国」を「家庭」に例え、一つの理想的な家庭を提示することで、国を管理する人間が如何にあるべきかをディケンズは説いたのではないだろうか。

最後にこの小説のタイトルの候補となった「トム・オール・アローンズ」について一言付け加えておく。[†]「トム・オール・アローンズ」とは、ジョーが住んでいる貧民街の名前であるが、ここは「ジャーンディス対ジャーンディス裁判」で争われている物権であった。大法院の怠慢により、この地区は荒れ果て、家は倒れ、壁は崩れ落ちていく。つまり、ジョーを初めとするここに住む人々は大法院の間接的な犠牲者であるのだ。この観点から見ると、「トム・オール・アローンズ」は、大法院を批判する小説のタイトルとして意に叶ったものであるし、大法院の害悪を示すものとして、荒涼館よりは直接的でもある。しかしそれでも『荒涼館』のほうがタイトルとして相応しいとディケンズが考えたのは、彼が当時の社会を、荒廃しきった絶望的なものというよりも、「改善されうる」[‡]ものと考えていたからではないだろうか。悪しき制度の犠牲であり続けた「トム・オール・アローンズ」をタイトルにすると、この小説で描かれる世界は絶望的なものとなる。しかし前向きに努力するエスタやジャーンディスが生活する「荒涼館」をタイトルにすることで、荒廃した社会に希望を与えることができるのだ。その意

味で、ディケンズが「トム・オールアローンズ」よりも『荒涼館』の方がタイトルとして相応しいと考えたのも当然であろう。

-
- 一 テキストとして、Charles Dickens, *Bleak House*, ed. Andrew Sanders (London: J. M. Dent, 1994)を用いた。引用文の頁数もこの版に拠る。尚、引用文の日本語訳は拙訳。
- 二 Edgar Johnson, *Charles Dickens His Tragedy and Triumph* 2vols (New York: Simon and Schuster, 1952) vol2, p.746.
- 三 Norman Page, *Bleak House: A Novel of Connections* (Boston: Twayne Publishers, 1990) pp.13-14.
- 四 A. E. Dyson, *The Inimitable Dickens* (London: Macmillan, 1970) p.181.
- 五 H. M. Daleski, *Dickens and the Art of Analogy* (London: Faber and Faber, 1970) p.183.
- 六 *Ibid.*, p.184.
- 七 F. R. and Q. D. Leavis, *Dickens the Novelist* (London: Chatto and Windus, 1970) p.144.
- 八 H. M. Daleski, *Dickens and the Art of Analogy*, p.186.
- 九 J. Hillis. Miller, *Charles Dickens: The World of His Novel* (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1959) p.200.
- 十 H. M. Daleski, *Dickens and the Art of Analogy*, p.187.
- 十一 Edgar Johnson, *Charles Dickens His Tragedy and Triumph* vol2, p.746. 「トム・オール・アローンズ」は、ディケンズが最初に思いついたこの小説のタイトルであった。
- 十二 A. E. Dyson, *The Inimitable Dickens*, p.179.

『早稲田大学高等学院研究年誌』第四十三号（早稲田大学高等学院、一九九九年三月）